

## 第2回解体新書塾

# 「公民館・地域自治のあり方をとらえ直す自治体間共同研究」 の記録



と き 平成28年2月21日(日)、22日(月)

ところ 飯田市公民館、天龍峡温泉交流館、飯田市役所本庁舎

## 第2回解体新書塾

### 「公民館・地域自治のあり方をとらえ直す自治体間共同研究」開催要項

#### 1 趣 旨

「地方」分権を進めようという国の政策動向の中で、住民自治力を高めるための行政の支援や新たな仕組みづくりを進めようとする動きが全国各地で取組みが始まっている。この中で住民自治を高めるための機関として公民館に改めて注目が集まる一方で、行政委員会である教育委員会から首長部局に補助執行する動きや、公民館を廃止し、コミュニティセンターとして再生させようとする動きなど首長の直接的な指示の元、住民自治の機関を支える仕組みを改変しようという動きが進んでいる。

飯田市の場合、民主主義の学校、郷土復興の拠点として戦後誕生した公民館の性格を色濃く残し、環境事業や観光事業など全国に先駆けた発信の土台として機能している。

住民自治力を高めるための基礎は、そこに暮らす住民自身が学ぶこと、そして個人としての学びから集団としての学びと活動に広がっていくことである。これを「学びあう地域づくり」ととらえ、日のような地域づくりを支える自治体の在り方を考えることをねらいとし、飯田型の公民館をモデルとして解体新書塾を実施する。

#### 2 と き

平成 28 年 2 月 21 日(日)～22 日(月)

#### 3 と ころ

- (1) 飯田市公民館（長野県飯田市吾妻町 139 番地 tel 0265-22-1132）  
2月21日(日) 午後1時から5時15分 飯田市公民館大会に参加
- (2) 天龍峡温泉交流館（長野県飯田市川路 4992-1 tel 0265-27-4011）  
2月21日(日) 午後6時30分から 懇親会、宿泊
- (3) 飯田市役所本庁舎 C 棟 301 会議室（長野県飯田市大久保町 2534 番地）  
2月22日(月) 午前9時から午後3時 講義、話し合い

#### 4 日 程

2月21日(日)

- 13:30～15:00 明治大学農学部 **小田切徳美教授による講演**
- 15:15～17:15 飯田市公民館大会の**分科会に参加**
- 17:30 会場移動（各自）
- 18:30～20:30 **講師、飯田市理事者を囲んだ懇親会**（天龍峡温泉交流館にて）
- 21:00 天龍峡温泉交流館で宿泊

2月22日(月)

- 9:00～10:15 講義Ⅰ **「キーノート対談：学習、自治、協働、まちづくり…」**  
**尼崎市顧問船木成記氏&飯田市公民館木下**
- 10:30～11:30 講義Ⅱ **「『自治の質量』と自治体財政」九州大学八木信一先生**
- 11:30～12:15 講義Ⅲ **「共創の場から生まれる『善い地域』づくり」牧野光朗飯田市長**
- 12:15～13:00 昼食
- 13:00～15:00 ふりかえり **「参加者全員で」**

## 5 参加者

学びあう地域づくりを土台として地域自治の拡充を進めようとする自治体の職員

**兵庫県尼崎市、石川県内灘町、島根県邑南町、長野県松本市、上田市、駒ヶ根市、飯田市**  
**地域のガバナンス、学びあう地域づくりに関心のある研究者**

## 6 参加費

8,040 円 (資料代1,000円、1日目懇親会3,000円、宿泊費2,540円、2日目朝食代500円、昼食代1,000円)

## 7 参加申込み

(1) 参加を希望される方は以下様式に記入のうえ、2月10日(水)までに FAX (0265-22-1022) または e-mail (iccc01@city.iida.nagano.jp) にて、飯田市公民館(担当:木下、氏原、小島)までお申し込みください。

## 8 その他

- (1) 解体新書塾の初日企画である、第53回飯田市公民館大会の内容は、別紙案内をご参照ください。  
(2) 照会事項などありましたら、飯田市公民館まで何なりとお尋ねください。

飯田市公民館 担当 木下、氏原、小島  
〒395-0085  
長野県飯田市吾妻町139番地  
Tel0265-22-1132 fax0265-22-1022  
e-mail iccc01@city.iida.nagano.jp

### ..... 解体新書塾参加申込書 .....

氏名	性別	住所	電話	e-mail
	男・女	〒		

2月21日(日)					2月22日(月)					
全体会	分科会	希望分科会	懇親会	宿泊	朝食	講義1	講義2	講義3	昼食	ふりかえり会
			3,000円	2,540円	500円				1,000円	
参加・不参加	参加・不参加	( )分科会	参加・不参加	希望・不要	希望・不要	参加・不参加	参加・不参加	参加・不参加	希望・不要	参加・不参加

参加費	資料代1,000円+上記費用	合計	円
-----	----------------	----	---

## 第2回解体新書塾 参加者名簿

(順不同: 敬称略)

No.	氏名	所属	性別	2月21日(日)				2月22日(月)				部屋割	交通手段	
				全体会	分科会	懇親会	宿泊	朝食	講義 I・II・III	昼食	振返り会			
1	井上 真穂	立命館アジア太平洋大学	女	○	2	○	○	○	○	○	○	○	つつじ	バス利用
2	木下 岳士	駒ヶ根市赤穂公民館	男	×	×	×	×	×	○	○	○			
3	塩澤 真洋	駒ヶ根市赤穂公民館	男	○	1	○	○	○	○	○	○	○	りゅうかく	バス利用
4	行野 修一	内灘町大学公民館	男	○	6	○	○	○	○	×	×	○	りゅうかく	バス利用
5	粕井 健一	内灘町大学公民館	男	○	1	○	○	○	○	×	×	○	りゅうかく	バス利用
6	潟淵 節子	内灘町大学公民館	女	○	3	○	○	○	○	×	×	○	つつじ	バス利用
7	橋本 尚也	邑南町日貴公民館	男	○	1	○	○	○	○	○	○	○	せんじょう	バス利用
8	船木 成記	尼崎市顧問	男	○	未定	○	○	○	○	○	○	○	ふうえつ	バス利用
9	中浦 法善	尼崎市市民協働局長	男	○	未定	×	×	×	×	×	×	×		
10	桑田 一夫	尼崎市園田公民館長	男	○	1	○	○	○	○	○	○	○	ふうえつ	バス利用
11	桂山 智哉	尼崎市保護課適正化係	男	○	1	○	○	○	○	○	○	○	ふうえつ	バス利用
12	上田 真弓	園田女子大学	女	○	1	○	○	○	○	○	○	○	つつじ	バス利用
13	酒井 和彦	松本市	男	○	未定	×	×	×	○	○	○	○		
14	倉澤 聡	松本市	男	○	2	○	○	○	○	○	○	○	よくかく	バス利用
15	勝山 裕康	松本市奈川公民館	男	×	×	×	×	×	○	○	○	○		
16	床尾 拓哉	松本市田川公民館	男	×	×	×	×	×	○	○	○	○		
17	石川 和也	松本市里山辺公民館	男	×	×	×	×	×	○	○	○	○		
18	竹内 則義	松本市本郷公民館	男	×	×	×	×	×	○	○	○	○		
19	高橋 伸光	松本市中央公民館	男	×	×	×	×	×	○	○	○	○		
20	金井 稔	松本市中央公民館	男	×	×	×	×	×	○	○	○	○		
21	横山 史樹	松本市中央公民館	男	○	全て	○	○	○	○	○	○	○	よくかく	バス利用
22	中村 文昭	上田市西部公民館	男	×	×	×	×	×	○	○	○	○		
23	山口 美栄子	上田市上野が丘公民館	女	×	×	×	×	×	○	○	○	○		
24	小原 和也	飯田市	男	○	1	○	○	○	○	○	○	○	ふうえつ	バス利用
25	筒井 文彦	飯田市	男	○	1	○	×	×	×	×	×	×		
26	鈴木 勇氣	飯田市羽場公民館	男	スタッフ として 参加		×	×	×	○	○	○	○		
27	西脇 充	飯田市丸山公民館	男			×	×	×	○	○	○	○		
28	横山 淳也	飯田市座光寺公民館	男			×	×	×	○	○	○	○		
29	永田 麻美子	飯田市上久堅公民館	女			×	×	×	○	×	×	○		
30	新井 康平	飯田市千代公民館	男			×	×	×	○	○	○	○		
31	熊谷 隆幸	飯田市竜丘公民館	男			×	×	×	○	×	×	○		
32	小池 勝士	飯田市川路公民館	男			×	×	×	○	○	○	○		
33	青木 由美子	飯田市三穂公民館	女			×	×	×	○	○	○	○		
34	平沢 真一	飯田市鼎公民館	男			×	×	×	○	○	○	○		
35	村澤 勝弘	飯田市上村公民館	男			×	×	×	○	×	×	○		
36	林 優一郎	飯田市南信濃公民館	男			×	×	×	○	○	○	○		
37	向井 健	松本大学	男	○	1	×	×	×	×	×	×	×		
38	太田 隆之	静岡大学	男	○	6	○	○	○	○	○	○	○	けいたん	バス利用
39	八木 信一	九州大学	男	○	6	○	○	○	○	○	○	○	けいたん	バス利用
40	小田切 徳美	東京農業大学	男	○	1	○	×	×	×	×	×	×		
41	牧野 光朗	飯田市長	男	○	×	○	×	×	×	×	×	×		
42	木下 信一郎	飯田市公民館	男	スタッフ として 参加		○	×	×	×	×	×	×		
43	氏原 理恵子	飯田市公民館	女			○	○	○	○	○	○	○	つつじ	
44	小島 一人	飯田市公民館	男			○	○	○	○	○	○	○	せんじょう	
45	木下 巨一	飯田市公民館	男			○	○	○	○	○	○	○	けいたん	バス利用
				21人		22人	18人	18人	39人	33人	33人			16人

# 第2回解体新書塾の記録

## 1 概要

(1) と き 2月21日(日)、22日(月)

### (2) ところ

1日目会場 飯田市公民館  
宿泊・懇親会 天龍峡温泉交流館  
2日目会場 飯田市役所

### (3) 内 容

2月21日(日)

13:00～17:15 飯田市公民館大会参加

18:30～20:30 懇親会

2月22日(月)

9:00～10:10 キーノート対談 尼崎市顧問船木成記氏&飯田市公民館木下巨一

\* 当初予定した日本福祉大学大濱裕氏「地域の固有性分析から始まる地域開発」の講義からの変更

10:20～11:30 講義Ⅰ『自治の質量』と自治体財政 九州大学八木信一氏

11:35～12:30 講義Ⅱ「共創の場から生まれる『善い地域』づくり」飯田市長牧野光朗

13:15～15:00 振り返り会

## 2 参加者 42人

### (1) 地域・自治体から

兵庫県尼崎市3人、松本市9人、石川県内灘町3人、島根県邑南町1人、上田市2人、駒ヶ根市2人、飯田市17人 計37人

### (2) 大学・研究者

九州大学、静岡大学、立命館環太平洋大学、明治大学、兵庫教育大学 計5人

## 3 キーノート対談「学習、自治、協働、まちづくり…」

尼崎市顧問 船木成記氏、飯田市公民館副館長 木下巨一

(木下)

### (1) 解体新書塾開催の経過と主旨

- ・ 何年前、飯田市を会場に日本公民館学会の研究会が開催された。この時市長も会に参加したが、次のようなことを感じ、広報いいだの市長コラムでも述べている。「公民館に対す

る考え方のあまりの違いに驚いた。飯田型の公民館は、住民にとっての住民自治の意識化や、職員にとっての市民協働の意識化の土台として十分機能しているが、他地域との違いがガラパゴスのようになるとしたら、飯田にとってもそれは決して良いことではない。飯田型の公民館の仕組みや考え方を他の地域にも伝えていくような取組が必要である。」

- ・ 市長の意思を受けて一昨年 10 月に第 1 回目の解体新書塾を開催した。このことが一つの契機となり、尼崎市での「学習する地域づくり」の取組みに結び付いたほか、長野県内では県内公民館職員の有志が集う「長野県公民館職員研修会」がこれまでに 2 回開催されたり、全国の自治体関係者が集い学びあう地域づくりや市民協働について考える「自治と協働のまちづくりを目指す研究会」が昨年は尼崎で、来年は松本市で開催されたり、本日の講師としてお願いした九州大学の八木先生による、住民自治の力のある自治体・地域と自治体財政の関係分析を行おうという動きが出るなど、解体新書塾の試みが良い形で広がりを見せている。
- ・ 今回の解体新書塾は、飯田市の住民による主体的な地域づくりの活動のまとめと交流会である飯田市公民館大会への参加を基調とし、2 日目を初日の大会を受けた座学として計画した。この形が一つの定型となれば、次年度以降も継続していきたい。

## (2) フィリピン・レガスピプロジェクトについて

- ・ 当初予定した大濱先生の都合が悪くなり、代わりに私から大濱先生の指導に基づく途上国への支援の取組みについて報告したい。
- ・ この事業は、フィリピン・レガスピ市に飯田型の公民館・地域自治の仕組みや考え方を移転することをねらいとした事業である。途上国に対する ODA の取組みは、インフラなどモノの援助が中心でかつ、援助が終わったときに現地での活動も終わってしまうことが大半であると聞いている。飯田の取組みは、モノの援助に併せて、対象となる地域の住民の意識づくりや組織づくりを進めることで、モノの管理や運営のできる自治の力を形成することに特徴がある。
- ・ 私たちがこの取組の初期から関わっているプロ村では飲料水の確保という生活課題を住民全体の課題として共有するところから始まり、付設された水道供給施設を管理運営するための組織が、11 年経過した現在、水道管理施設から地域の課題を解決するための住民自治組織と育っている。また、プロ村の取組みがお手本となり、火山の噴火と大型台風の襲来により移転を余儀なくされた人々が暮らすタイサン村では、新たに住み着いた住民による組織がつくられ、今回の支援によって建設された「タイサン公民館」を拠点に、地域の課題に向き合う住民自治の取組みが展開されている。
- ・ 途上国においては、家族や血縁同士の助け合いの習慣はあるものの、同じ地域に住まう者同士の協同の取組みは弱いかないということが一般的のようであり、フィリピン・レガスピ市における住民自治の意識化や組織化の取組みは、数少ない成功例と評価されている。
- ・ 2 月に 8 日間の日程で、現地の様子をモニタリングした訪問団に対し、レガスピ市長は、これまでの飯田の取組みに対する感謝の気持ちを表明することに併せて、飯田市との今後の関係に関わり、インフラの調達は自分たちの責任で対応する代わりに、意識化組織化というソフトな部分の飯田市の支援を期待する発言を受けた。途上国においてインフラを抜

きにした支援という考え方は極めて異例であり、現地における住民自治の取組みは、行政側にも考え方が浸透しているという意味でも、大変画期的である。

- ・ 飯田型の公民館・地域自治の仕組みの国外移転の取組みは、国内他地域においても同様の取組を進める際の参考としても、大変価値ある取組であるととらえている。

(船木)

### (3) 大濱先生の資料を受けてから

- ・ 大濱先生の資料の中で、僭越ながら船木が大切だと思うことは、住民の自己組織力を養成するという視点。外部から住民に対して何とかしてあげるという姿勢ではなく、そこに暮らす住民が自己組織力を持つことができるように外から関わるることができるかどうか、途上国に限らず、日本の地域においても共通して大事なことである。
- ・ 船木の専門のソーシャルマーケティングや、それに近い公衆衛生分野において、例えば、保健師による住民の健康を守る活動は大濱先生の視点と共通している。
- ・ 例えば「健康づくりのためのオタワ憲章（1986）」では、健康づくりとは単なる疾病の予防ではなく、健康を維持するために人々が意識化や組織化のプロセスの中で、社会的な諸課題の総体として健康の問題をとらえることの必要性をうたっている。この憲章では、社会が健康でなければ個人は健康ではありえないとし、平和・住まい・教育・食糧・収入・安定した環境・持続可能な資源・社会的公正と公平などの社会的な課題が健康を規定すると定義している。
- ・ 公民館、あるいは市民協働を支える行政の役割は、市民とともに「気づきと変革を促進し」、「そのプロセスを支援し」、「地域資源の積極的な連携や組み換えを進め」、「問題やその解決のための方策の提供や実行をすすめる」ことという、一連の協働取組にあるといえる。
- ・ 現代はこのような「協働」のデザインが求められている。協働はそのこと自体のみが目的ではなく、協働のプロセスの中で何を手にするかということも重要である。複眼的な視点ともいうべき、協働のプロセスにおいて学んだことや気づいたことをどのように次のステップにつなげていくか、また当初ねらったことや期待したことと異なる副産物が生まれることが往々にしてあるが、それをどのように評価し、取り扱うかなどの視点が求められる。

### (4) 尼崎で取り組んでいること

- ・ 尼崎において構築しようとしている「学習する地域」でいう学習とは、単なる学力ではなく、日々日常にある学びである。 尼崎は公害問題、アスベスト、福知山線脱線事故など、かつて多くの問題が生まれ、それを乗り越えるための多くの学びがあった。これらの学びは状況の中に埋め込まれてきた学びであり、語ることで顕在化し、意味づけられていくものである。こういう学びが自治の基盤になれば、自治は存在しないはずである。
- ・ 尼崎はこれから、市民自治力、シチズンシップの涵養を目指し、「学習する地域の構築」「内発的シティブロモーション」「ソーシャルビジネスの振興」という3つのテーマに

力を入れてゆく。

- ・ このうち「内発的シティプロモーション」とは、シティセールス的な、対外的な PR ではない。尼崎市民のみならず、尼崎に関わる人すべてに対して、一人ひとりが尼崎に愛着と誇りを持つことができるようにする営みである。また「ソーシャルビジネスの振興」とは、課題に溢れた課題先進都市としての、その都市型課題を解決するため創出されるソーシャルビジネスに対して、市内外の若者たちを含めて、多くの人が実践的に関わることを通した経験機会を提供するほか、実践型の長期インターンシップなどを通じて、地域や社会の課題に関わる人びとをつなげたり広げたりすることをねらいとしている。
- ・ 加えて、昨年 8 月に「みんなのサマーセミナー」を実施したが、これはいうなれば「学習する地域」の文化祭としての位置づけと捉えることができるだろう。市民主導で、夏休みの二日間、誰でも先生、誰でも生徒、必要なものは、筆記用具とスリッパと好奇心！ということで、170 講座、3,000 人が集まる学びの場となった。この成功は、大きなまちの自信というか、勇気につながっている。
- ・ 最後に、地域資源とは何か？ということ。それは、船木が考えるに、地域社会の持つ「協働力」のことであり、協働の生み出す「総量」であると捉えている。これまで、行政が得意なことは、手をさしのければならない人々に手を差し伸べる仕事であったが、これからの時代、人口減少社会の中、労働人口が減り、社会保障領域の必要とされるサービス総量が増えることは、ほぼ自明であろう。しかも、行政はスリムになりたい。もはや、必要としている人に直接手を差し伸べることができなくなる時代がすぐそこであろう。その時に行政はどうすればいいのか？直接手を差し伸べることがかなわないときには、力のある住民と出会い、彼らとともに手を差し伸べる必要がある人に手を差し伸べることでできる総量を増やしていくしかない。これから地域が持つべき力は協働力であり、行政は、その協働力を最大化することが、メインの仕事であり、その先端にあるのが公民館・社会教育・保健師などであると、私はとらえている。

#### 4 講義 I 「『自治の質量』と自治体財政」九州大学 八木信一氏

\* 参考文献「再生可能性エネルギーと地域ガバナンス」

(再生可能エネルギーと地域再生 (第 6 章) : 諸富徹編著、日本評論社)

##### (1) 地方自治をとらえ直す : 「自治の質量とは何か」

- ・ 地方自治は団体自治と住民自治で構成される。団体自治とは「同じく政府組織を構成するが、国の権限と矛盾しない形で、団体固有の自治権をもつこと」、住民自治とは「地域の構成員である住民が地域政治に参加し、住民の意思決定に基づいて、地方自治体の組織を形成し、また運営が行われていること」とそれぞれ定義されている。
- ・ 自治の総量とは、団体自治と住民自治を合わせた、それぞれの自治体における自治システムのパフォーマンスを指す。これに対して、自治の質量とは、団体自治と住民自治という自治システムのバランスを指す。



- ・ 近年において地方自治体には、「地方分権一括法」「三位一体改革」「平成の大合併」「地方財政健全化法」「地域主権改革」を例とした国による制度改革の結果として、団体自治システムの総量が大幅に増加してきた一方で、少なくない地域において住民自治は停滞したり、後退したりしている結果として、自治の質量が崩れている。さらなる問題は、このような自治の質量をめぐる地域間格差が大きくなってきていることである。
- ・ このような自治の質量をめぐる、戦後の著名な行政学者である辻清明氏は次のように述べている。「しばしば地方自治の本旨は団体自治と住民自治から構成されていると説明されているが、両者がどのような関係にあるのかは、研究者の間でもあまり究明されていない。その結果、住民自治よりも団体自治の方が優先的な役割を占めている現状に対し、それほど注意していないようです。団体自治と住民自治とが対立するとき、団体自治はともすれば既成の国や中央政府の立場に立つことも少なくないのです」。この指摘は、今日においても変わらないところが多いのではないか。

## (2) 地方自治の経済学：内部効率性と外部効率性

- ・ 地方自治を経済学の視点から考えると「内部効率性」と「外部効率性」という 2 つの側面から見ることができる。
- ・ 内部効率性とは主に団体自治に関わる視点であり、地方自治体がニーズを満たすための行政活動を、予算制約のもとで効率的に実施することである。他方で外部効率性とは団体自治だけでなく住民自治ともかかわる視点であり、具体的には住民自治のニーズやウォンツと合致するように、地方自治体もしくはそれ以外のアクターによって行政サービス（もしくは公共サービス）が提供されることである。
- ・ 内部効率性はその地域に暮らす人々の共同需要、すなわちニーズを満たすものであり、主に地方自治体や国がその役割を担っている。これに対して外部効率性は地域住民の共同需要に限らず、個人の欲望、すなわちウォンツまでが対象に含まれていることから、地方自治体や国といった政府に加えて市場や家族・地域共同体によっても提供されるものである。そのうえで重要なことは、共同需要であるニーズと個人の欲望であるウォンツの境界線は連続的なものであり、なおかつこれらの間の境界は地域や時代のありようによって変動しうるものであるということである。
- ・ 飯田市の公民館活動は、地域共同体の構成員である住民自身が活動を通してウォンツや共同体に限定的なニーズを満たすことで、飯田市が共同体を超えたニーズを満たす活動に力点を置くことができ、そのことにより自治体財政が健全に保てているのではないだろうか。
- ・ 飯田市の公民館には「地域中心の原則」「並列配置の原則」「住民参画の原則」「機関自立の原則」という 4 つの運営原則があるが、このうち「地域中心」「並列配置」という 2 つの原則によって公民館ごとの多様性が担保されていることが強みととらえている。また専門委員会制度や分館制度によって「住民参画」の原則が担保されてきたが、この中で特に広報委員会制度が住民自治力の形成に大きな役割を果たしているのではないか。

### (3) 飯田市型公民館の多面的評価①：効率性の観点から

- ・ 飯田型公民館について効率性から見た評価、すなわち定量的な評価と、創発性からみた評価、すなわち定性的評価の二つの側面から評価を試みたい。
- ・ このうち効率性から見た評価の指標としては、さしあたり財政面から類似団体と比較する方法を取ってみた。飯田市の財政の特徴は歳入面では地方税の占める割合が低く、またこれを受けて地方交付税の占める割合が高いことである。このことは財政力としては、あまり恵まれていない状況にあることを意味している。
- ・ **歳出面の特徴は、**人件費の低さと補助費の高さである。このうち人件費の低さについては職員給の低さに由来する部分もあるが、私が個人的により興味をもっているのはそれ以外の要因である。それが**補助費の高さ**に関係していると現時点では考えている。これは、**飯田市以外の組織等による事務事業や活動が活発に行われていることを反映している。**具体的には、飯田市については広域行政（南信州広域連合）の役割が大きいが、これ以外にも補助費のなかで特に教育費(236,835千円)や地域自治支援(103,548千円)の状況を分析してみたい。とくに後者はパワーアップ地域交付金を通して公民館活動にも関わっているものであり、注目している。

### (4) 飯田型公民館の多面的評価②：創発性の観点から

- ・ 創発性から見た評価をする場合、**飯田型公民館のうち地区公民館が行政と住民の橋渡し組織としての機能を持っている**と捉えることができる。なお、飯田市の場合では公民館が橋渡し組織としての機能を担っているが、他の地域や事例では公民館以外の組織が担っているケースもあるので、公民館だけに限定せずに柔軟に捉えることが望ましい。例えば、熊本地域における地下水保全では場面ごとにNPOや行政のなかの特定のセクションがこのような橋渡し組織としての機能を担ってきた。また、このような機能に着目した捉え方は、「飯田は公民館があるから特別である」という表面的な意見に対して、実態に基づいた建設的な批判をするためにも必要である。
- ・ **橋渡し組織には4つの機能がある。第1に「召集機能」。**これは住民が互いに顔を合わせる場を提供し、あるいは住民を巻き込んでいく機能であり、「場」ととらえることができる。**第2に「解釈機能」。**これは地区公民館に集う住民がそれぞれ有する情報を理解し、また利用できる認識する機能であり、「学習」ととらえることができる。**第3に「協働機能」。**これは住民間、あるいは住民と公民館主事との間で率直な「対話」が行われ、協働を促す機能である。**第4に「媒介機能」。**これは住民それぞれの利害得失を表出させ、利害「調整」を進めていく機能である。
- ・ これらの機能に沿って飯田型公民館を整理してみると、まず分館や地区公民館、そしてまちづくり委員会（地区公民館が含まれている地域自治組織）が「場」となり、専門委員会とその活動を支える公民館主事が活動を進めるために「学習」し、「学習」を土台に「事業」を進めている。そして「事業」を振り返りとして「学習」し、さらに新たな「事業」に結び付けていくというサイクルの中で、住民同士や住民と公民館主事との間で「対話」が進められる。このような公民館の機能が地域ガバナンスの苗床となり、行政、議会、企業、住民間の利害「調整」を円滑に進める素地を形成してい

る。

- ・ しかしながら、飯田型公民館と一口に言っても、地域によって多様性があることが東京大学と飯田市の共同研究の中で明らかにされている。その研究における調査は市街地にある東野地区と中山間地にある千代地区で進められたが、東野地区の場合は公民館の利用目的が趣味やサークル関係者が多いことに対し、千代地区の場合は各種団体役員としての会議・活動への参加や、地域行事への参加の割合が多い。
- ・ これらの傾向を踏まえて、創発性を構成する要素とその関係性を整理したい。慶応義塾大学の飯盛義徳氏の枠組みを援用すれば、まず「場（プラットホーム）」は人・組織・制度によって提供される創発性の基礎である。そしてこの「場」に人々が集まり、相互作用が起こることで「関係性」が形成される。そして「関係性」の上に「資源化プロセス」が存在する。このプロセスは、「①地域資源の発見・再認識」「②地域資源の意味づけとそれを通した価値観の共有」「③資源の戦略的展開（評価を含むマネジメント）」で構成されるが、必ずしもこの順番で生起されるものとは限らない。これらが創発性の構成要素である。
- ・ 飯田型公民館の取組のうち、東京大学の荻野亮吾さんらを取り上げた川路地区における通学合宿を創発性の視点から分析すると、公民館における「川路の明日を考える研究集会」が通学合宿に至る問題提起を行う「場（プラットホーム）」であり、これをきっかけとして公民館主事がつなぎ役となりながら地域・学校・保護者の「関係性」を形成し、通学合宿に至る話し合い、通学合宿事業、振り返り会の一連のプロセスの中で、子育てに関する共通理解の形成や、子育てに利用できる地域資源の発掘と再組織化という「資源化プロセス」が進んだと整理することができる。
- ・ この事例において注目したいのは、創発性とは無から有を生み出すものではなく、これまであるものを組み替えることで生み出すことができるものであり、川路地区の通学合宿においては川路の明日を考える研究集会という地区で何年も続いて公民館活動を、通学合宿という事業を通して組み替えることで、新たな認識の共有化や地域資源の掘り起こしやそれを踏まえた再組織化が行われたことである。
- ・ 最後に、創発性が効率性へとつながる可能性もあることを指摘しておきたい。第1回解体新書塾では、飯田型公民館の仕組みの中で、一般的な住民像と職員像の変容が認められた。具体的には、「要望する住民から地域のことを考えている住民」へ、「信頼できる仲間であり、外の目で関与してくれる職員（主事）」へという変容である。
- ・ このような変容を通して、飯田型公民館の仕組みの中で住民と職員との信頼関係が生まれていることは、それを土台とした租税協力を得やすくする環境が飯田市にはあることが窺える。近年の飯田市における市税の収納率の上昇傾向は徴税業務の強化に由来すると聞いているが、それ以前の数値も他の自治体と比較すれば十分に高い。このような政府に対する信頼と財政赤字（とそれをもたらす租税抵抗）との相関関係は、慶応義塾大学の井手英策氏がリードしながら若手の財政社会学者が活発に研究している。ただ、そこでは国際比較が中心であり、地方自治体を対象とした比較検討について、飯田市を中心としながら今後進めていきたいと考えている。

## 5 講義Ⅱ「共創の場から生まれる『善い地域』づくり」飯田市長 牧野光朗

\* 参考文献「円卓の地域主義～共創の場づくりから生まれる善い地域とは」

(牧野光朗編著：事業構想大学院大学出版部)

### (1) はじめに

- ・ このたび「円卓の地域主義～共創の場づくりから生まれる善い地域とは」という本を出版する運びとなった。飯田市では毎年夏に全国各地の大学生を対象とした「フィールドスタディ」というプログラムを実施しているが、前々からこのプログラムの柱となるテキストの必要を大学側から求められていた。本日の講義のテーマも、この本から採っている。

### (2) 持続可能な地域づくりのために

- ・ 日本の総人口は、2008年をピークに減少しているが、飯田・下伊那地方では、すでに全国よりも早いペースで減少が始まっている。
- ・ 飯田市では高校卒業後8割の生徒が進学や就職で飯田を離れ、このうち4割が戻ってくるが、6割は飯田から離れてたままである。このことによりこの地域の次代の担い手不足が続くことは、地域の活力低下に結びつく。飯田市では地域に根差した公民館活動の影響もあり、小学生時代は地域とのかかわり合いが大変厚いが、中学生、高校生と年を重ねるほど地域への関わりが弱くなっている。一度地域を離れてしまう高校卒業までに、地域に愛着と誇りを持てる人材の育成を一貫して実施することで、将来の地域の担い手を養成していくことが課題である。
- ・ 一方基礎自治体の行財政運営は年々厳しさを増しているが、逆に公共的なニーズは増加しており、これらのニーズをどのように満たすのかという議論が、国でも地域でも不足している。
- ・ 私は、これからの行政サービスは、基礎自治体は定員の適正化や人件費の抑制などを図りながらよりコンパクトな自治体を目指し、「地域自治組織の機能強化」、「公共サービス（保育園等）の民営化やPFI、PPPの導入」、「新しいサービスとしてのコミュニティビジネスの創出」など多様な主体による協働で、行政サービスの拡充を進めていくことが必要と考えている。

### (3) 環境の取組みを例に

- ・ このことを環境の取組みを例に考えてみたい。
- ・ 飯田市では市民による環境の取組みがコミュニティビジネスとして発展した例として、おひさま進歩エネルギーの取組みがある。おひさま進歩エネルギーははじめ、市民からの出資をファンドとして募り、その資金を活用して公共施設などの屋根を借りて太陽光発電事業を展開する事業からスタートした。その後個人で太陽光発電装置を家庭に設置する際に、初期投資をゼロにしてリース方式で運用する「おひさま0円システム」を提案し、飯田信用金庫が資金を貸し出し、飯田市が信用を担保する仕組みを作

り上げた。

- ・ おひさま進歩エネルギーの社長を務める原亮弘氏は、もともと地域で公民館活動に熱心に取り組み、そういう公民館活動の学びの中から、エネルギーの地産地消の事業化を思い立った人物である。原氏は長年の地域活動の蓄積の中で「信用」を得、行政、企業、専門家と市民を結ぶ多様な主体の協働の中からダイナミズムを創発した。
- ・ このように、学びを土台とした多様な主体によるボトムアップの取組を通して、地域の中からダイナミズムを創発し、様々な課題の解決につなげる取組を広げていくことが必要である。

#### (4) 公民館的な手法による共創の場づくりを進める、地域経済活性化プログラムの取組

- ・ 私は現在、国の経済財政諮問会議の下に設置された専門調査会「経済・財政一体改革推進委員会」の専門委員（内閣府）を務めているが、メンバーの中で地方自治体からの選任は私だけであり、他は中央の研究者や財界人である。地方経済の再生には多様な主体によるボトムアップの取組が不可欠であることを主張しているが、その考えがなかなか理解されていない。
- ・ 飯田市では地域の自立に向けて、経済自立度という考え方を採用し、取組を進めているが、公益財団法人南信州・飯田産業センターがこの取組の拠点として機能している。ここは、産業界の公民館ともいえる場所であり、事業者や行政、研究者ら多様な主体が一体となり円卓を囲みながら課題に向き合っている。
- ・ 公民館的手法というものは、カルチャーセンター化しているといわれる他地域の公民館のような姿ではなく、地域づくりそのものであり、そういう取組は産業振興においても大変重要である。

#### (5) 学びと交流が地域をつくる

- ・ 飯田市では平成 8 年より都市の中学生たちの修学旅行を受け入れ、農家への宿泊や農業体験などのプログラムを提供する「体験教育旅行」という取組を進めてきた。その後平成 10 年からは社会人による農業体験プログラムである「ワーキングホリディ」、平成 20 年からは大学生たちが夏合宿形式で飯田の地域づくりについて学ぶ「南信州・飯田フィールドスタディ」に取組んできた。
- ・ これらはもともと都市と農村の交流から始まった取組みであるが、この取組が発展して、全国各地の 31 大学 80 人の研究者が集い、飯田が抱える課題を共同で研究する「学輪 IIDA」というネットワークが誕生した。
- ・ 多様な主体が連携し、異なる分野や視点を持つものが共通する課題に向き合い、課題解決の取組を創発していく「共創の場」が、これからの時代には求められているが、これは、学びと交流が力となり、地域づくりに結びついた取組ととらえることができる。

#### (6) 持続可能な地域づくりに求められる事業構想（プロジェクトデザイン）

- ・ 持続可能な地域づくりのためには、こういう「共創の場」から課題解決のための事業

構想（プロジェクトデザイン）が生み出されていくことが必要である。

- ・ その取組の例として、飯田市上村地区の取組を紹介したい。
- ・ 上村地区は平成 17 年に飯田市と合併した人口 462 人、高齢化率 51.73%（H27 年 3 月現在）の地区である。上村地区では平成 24 年 4 月に、保育園の園児数がたった 3 人となり、翌年度には 1 人となってしまおうという事態に直面した。
- ・ 保育園の子どもたちが居なくなってしまうということは、そのまま小学校の存続問題にまで結びつき、地域の存続にまで影響のある問題であり、私は担当に、どのような方法を使っても、保育園を維持するよう指示をした。担当は地域内を歩き地域に縁故のある人の中で上村保育園に子どもを通わせる人を探し出し、現在は 5 人の子どもたちが保育園に通うことで、閉園の危機をとりあえず脱することができた。結果的に園児を獲得するためにかかった費用は年 300 万円であった。
- ・ この取組は持続可能な上村地区とするための入口政策であった。大事なのは出口政策である。上村地区では地域の取組として小沢川という地域の一級河川に小水力発電を設置し、その運用益で地域の課題を解決するための資金を賄おうという検討を進めている。
- ・ 上村地区に見られるように地域の存続のための新たな事業構想を行うことが、これからの地域には求められる。そのためには住民や事業者が主体となり、自分たちの地域は自分たちで作る自主自立の取組を進めていくことが必要である。

## (7) 善い地域をつくる

- ・ 私は今年の飯田市の年頭所感で、「善い地域」という考えを提唱した。「良い」という言葉は、他地域との比較の中で使われることが多く、比較ではなく普遍性のある意味を持たせるために「善い」という言葉を使わせていただいた。
- ・ 「善い地域」の重要な要素は二つ。QOL (Quality of Life) = 生活の質と、QOC (Quality of Community) = コミュニティの質である。
- ・ 「善い地域・飯田」のイメージを次のように例示してみた。
- ・ 長時間通勤をしなければならない大都市圏の生活とは違う、しかし、活力がなく若い人が根付かない田舎とも異なる、そういう姿。
- ・ 大都市の活力を取り入れる一方で、『ニッポンの日本』と称される地域固有の環境・文化を継承し、仕事だけでなく、家庭や地域も大事にする人が多く住む飯田。
- ・ 「善い地域」の最適規模は、「善い地域」をつくるために人々が「円卓」を囲み議論するのに顔が見える規模であり、それは 10 万人程度の規模ではないかととらえている。そう考えると飯田市は 10 万人、飯田下伊那は 16 万人という生活圈・経済圏であり、飯田下伊那地域は一体となって「善い地域」をつくっていくことができる地域ととらえている。
- ・ 「円卓」が“共創の場”として機能するためには、その地域に自主自立の精神が持続し、イノベーションを創発できることが必要である。
- ・ 持続可能な地域をつくるために飯田市は、「住み続けたい地域づくり」「帰って来られる産業づくり」「帰ってきたいと考える人づくり」という 3 つのつくりを進める「人材

のサイクル」という政策の柱を持っている。

- ・ このためには進学や就職で一度は飯田を離れても、小中高大と一貫して地域に向き合う学びを通じた人材育成ができていれば、地域に愛着と誇りを持ち、将来的に飯田に帰ってきて、地域を担う人材として活躍してくれる。そういう人材育成を進めていくことが必要であり、公民館活動や小中連携一貫教育、地域人教育などの果たす役割は大きい。

## 6 振り返り会

- \* 若手参加者（チームキラキラ）、研究者（チームしっかり）、ベテラン職員（チームぼちぼち）とネーミングして、メンバーを代表したフロアトーク

### (1) チームキラキラ

（石川和也：松本市里山辺公民館）

- ・ 牧野市長の講演の中で、公民館的な仕事は多様な人々が集うことで課題解決のイノベーションを誘発していく共創の場が求められているという話が印象に残った。公民館は地域づくりの拠点として、縦割りではなく、横をつなげるコーディネートの仕事であるということを改めて学んだ。

（鈴木勇氣：飯田市羽場公民館）

- ・ 自治の質量、あるいは総量という視点でこれまで考えたことはなかった。飯田の公民館の場合は、住民の主体的な活動が根付いているという土台の上で仕事をする事ができているが、住民自治の質量や総量を高める活動が自分自身にできているのか、改めて考えてみたい。自分自身の仕事の中では、転入者などに地域に興味を持ってもらいたいという考えから、イクメン講座を実施し、イクメン世代の地域活動の入口とする取組みを実施している。自分たちがこれまで意識せずにやっていた仕事や活動が、住民自治につながっているということに気付くことができた。

（青木由美子：飯田市三穂公民館）

- ・ 船木さんの言う、力のある元気な市民と行政が力を合わせて、手を差し伸べることが必要な人に関わっていくという話を聞き、自分自身の担当する三穂地区での仕事を振り返ってみると、この地区は人と人とのつながりは厚いが、本当に困っている人にアプローチができていないのではないか、と反省した。そういう力のある人たちを見つけて困っている人たちとつなげる仕事をしていきたい。

（橋本尚也：島根県邑南町日貫公民館）

- ・ これまで他地域の公民館のことを知らなかったが、参加した職員の意識の高さを感じ、大変研修になった。現在は 500 人の地域で公民館主事の仕事をしているが、公民館主事になる前は人口が少なければ住民から困ったことをどンドン話してくれると思って

いたが、実際にはそういう話はなかなか持ち込まれることはなかった。担当地区には保育所存続の問題が顕在化している。どのようにして住民が地域課題に対して当事者意識を持って取り組むことができるのか、考えていきたい。

(井上真穂：立命館アジア太平洋大学)

- ・ 私は卒論のテーマを地域活性化とし、飯田市の公民館活動を題材にまとめようと考えている。昨年夏に飯田市が大学生を対象に企画しているフィールドスタディに参加した。その時公民館主事の話聞いて興味を持ち、飯田の人たちがキラキラして輝いて見えた。私の生活する別府でも「オンパク」の取組を通してかつては大変活発な活動が行われていたと聞いている。その活動が現在は大変衰退していて、それを何とかしたいと考えている。飯田との違いは、地域の問題を共有する場や相手がないことなのではないかと考えている。地域に対して熱い思いを持つ人たちが協力して課題に向き合う取組みの機会を、自分の暮らしている地域でも設けたい。卒論では、飯田の人たちが当たり前だと思っていることが、実はすごいことであるということ、気づいてもらえるようなものにしたい。

(小原和也：飯田市環境課)

- ・ 市役所1年目で公民館自体が良くわかっていなかった。建物という意味だけでなく「やる」という言葉遣いにあるような機能であること、そして住民と行政が仲間として対等で共創していく場であるということを知った。市長の講義から、公民館の機能は、産業分野など他分野でも応用できるということが分かった。

(桂山智哉：尼崎市保護課適正化係)

- ・ 飯田市公民館大会は大変大勢の人で、行政と住民がともに集う場であった。1分科会に参加したが、高校生の時代から地域の活動に取り組む事例を聞き、この取組が大学生や他の機関に広がる可能性を感じた。現在の自分の仕事は生活保護の担当であるが、一般的な自治体ではひとりのケースワーカーに対して80世帯ほどであるのに対して、尼崎の場合は150~200世帯と倍以上という実態である。職員一人ひとりが当事者意識を持って、仕事の質を改善していくことに取り組んでいきたい。

## (2) チームしかり

(太田隆之：静岡大学)

- ・ 専門は地域政策で、元々飯田市の隣の喬木村の事例研究などにも関わっていた。私にとっての自治のイメージは、地域に存在する共有の土地や資源の管理にあり、そういう資源の持続的な共有管理の経験の中から自治の仕組みや考え方が生まれていくものにとらえていた。今回の研究会の中で、自治が、資源管理や経済活動よりももっと広い概念として定義されるものではないか、という考えを持つに至った。市長の円卓の話が特に印象深かったが、いわゆる様々な人や課題が行きかうプラットフォームを自治



としてとらえるという考え方をしてみたい。

- ・ 自治の根底は公共性というよりもたとえば自分の暮らしが豊かになるため、というエゴイスティックな側面がある。自分の暮らしを豊かにしたいという思いは誰もが持っているがたいていは潜在的であり、そういう思いを当事者性として引き出していくことが大事である。生きるために楽しみながら行動していこうということが自治の原点であると思う。

(上田真弓：兵庫教育大学)

- ・ 教育系の NPO での勤務も経験後文科省に入省し、現職にある。自分自身は地域づくりと人づくりを結びつけることをテーマとしている。
- ・ 今回の研究会に参加し、各地域にとって、産業振興や学校教育などの各政策はバラバラにあるのではなく、その基盤は地域づくりであると改めて認識した。仕事柄国の役割について考えることが多いが、現状ではこの点について、国は想像力が欠けたまま政策を打っていることがまだまだあると感じた。自分自身も含め、もっと想像力を持って政策を作ることが必要と考えている。
- ・ 個人的には、学輪 IIDA に参加してみたいなということと、今回の参加で飯田の取組が立体的に見えてきたとは言え、現場の動きを解明するため主事さんのどなたかにシャドウイングしてみたい。

(八木信一：九州大学)

- ・ 飯田市公民館大会ではムトスの分科会に参加した。分科会自体が地域課題を発掘する場として機能していた。この中で、地域課題についてはポジティブなものやネガティブなものがあるように感じた。このうちポジティブなものは、関係する人々がそれらの価値をすり合わせていくなかで当事者性が顕在化していくが、他方でネガティブなものは自身が問題の被害者である場合もあり、当事者の所在が（公害問題の教訓を踏まえると、関係性のなかで顕在化するかどうかは別問題であるが）比較的はっきりしている。
- ・ 2日間の論議の中で「当事者意識」が大きなカギとなっていたが、例えば公害問題などでは公害を発生させた企業などに対する責任論がまず問われ、責任あるアクターが関与するという捉え方であった。しかし、太田先生が指摘されている楽しさとかやりがいとかに関わる当事者意識は責任が起点となるのではなく、むしろ楽しさややりがいを顕在化させるために関与することや、それを促す場や関係性が起点となって責任を涵養し、当事者意識が高まるのではないだろうか。
- ・ 地域課題の解決にあたっては、ポジティブなものとポジティブなものを一体化することも可能である。例えば市長の講演の中で登場した上村地区のケースでは、少子化に関わるネガティブなものを解決するために、地域資源を活かした小水力発電事業を住民たちで起こし、それによって得られた収入を用いるというポジティブなものに取り組んでいる。

(船木成記：尼崎市)

- ・ 学習する地域を作ることができるためには、ボトムアップ型のリーダーシップが求められる。真の偉大なリーダーは、皆の力で掴み取った成果を、構成員が共通して認識することができる力を持った人間である。

### (3) チームぼちぼち

(中村文昭：上田市西部公民館)

- ・ 飯田や松本と上田の違いは、公民館の対象とする地域が前者は小学校区であるのに対して、私たちは中学校区であるという点であるが、このことは距離感の違いと整理することができる。距離感とは、地域への近さ、人との近さ、課題への近さの3つである。
- ・ 当事者性については、要望する側から自ら地域のことを考える存在へという住民像の変化が必要である。それは課題に対する自分自身の学び、市政によって近づけることができる。

(桑田一夫：尼崎市園田公民館)

- ・ 小田切先生の講義の中で、限界集落についての話の中で、そこに住む人たちのあきらめの気持ちが生まれたところで集落は崩壊する、という話が印象的である。市長の講義の中で上村地区で保育所の存続のためにどんな手を使ってでも頑張れと担当に指示した話は、その地域に学校や文化が存続することの意味を問うたととらえている。
- ・ 尼崎の公民館で地域づくりコーディネータの養成講座に取り組んでいる。コーディネータに必要な力量として、「巻き込まれる力」を意識している。

(高橋伸光：松本市中央公民館)

- ・ 当事者意識を持つ、ということは簡単ではない。無関心な人々に対して、なぜ地域づくりに関わらなければならないのかをどのように伝えていくか。学習、対話、課題共有が当事者意識を持つためのキーワードであると思う。私たち職員が住民にどのように近づいていくことができるかが試されている。
- ・ 松本市では公民館活動に加えて、福祉ひろば、地域づくりセンターという地域を拠点とした住民の集いの機関が連携して、これまで以上に幅広く、住民の暮らしに向き合う取り組みを始めたところである。市長の講義の中で、上村の事例が紹介されたが、できないことを前提にしない、ということ学んだ。工夫や知恵、住民との対話の中で、できないと思っていたことをできるようにしていくことが必要であることを学んだ。

(塩澤真洋：駒ヶ根市赤穂公民館)

- ・ 駒ヶ根市は3万人の人口に3つの公民館が設置されている。
- ・ 私は青年海外協力隊やJICA職員を経験しているが、フィリピン・レガスピ市の経験の

中で、インフラではなく、考え方を学びたいとレガスピ市の市長が発言したことはすごいことである。国際協力の案件の多くが、お金の切れ目が縁の切れ目とされている。レガスピ市の取組みでは現地住民の当事者意識を引き出し育むことに成功している。途上国の農村地域において一般的に当事者意識は成立していない。このことは、国内外他地域にもこの取組が移転の可能性を持つことを証明してくれたととらえている。

- ・ 赤穂公民館でも、これから住民主体の内発的な取組が生まれていくように、泥臭く取り組んでいきたい。

(木下巨一：飯田市公民館)

- ・ 第1回目の解体新書塾は自治体職員の力量形成をテーマとしたが、今回は飯田市民の多彩な住民活動の実際を知ってもらうために飯田市公民館大会への参加を初日に位置付け、翌日を座学という構成とした。
- ・ 来年1月に松本市で「第3回自治と協働のまちづくりを目指す研究会、松本集会」が計画されているが、この会も松本市の公民館研究集会と重ねた企画であり、その意味では松本集会のモデルとして試みた企画でもある。
- ・ また初回は兵庫県の尼崎市、松本市、駒ヶ根市、飯田市の参加であったが、今回は飯田市以上に地域に密着して公民館が配置されている島根県の邑南町や石川県の内灘町からも参加いただいた。
- ・ キーノート対談でもお話したが、フィリピン・レガスピ市に地域自治の仕組みや考え方を移転するという試みを通して、関わった飯田のメンバーは逆に自分たちの自治や公民館の在り方を振り返る機会となっている。このことは国内においても同様で、他地域との交流の中で、互いの違いを知ったり、共通して大事なことを学んだりすることを通して自分たちの地域の活動を磨いていくことができる。
- ・ 地方創生の動きの中で、山積する地域課題を解決するための地域の自治力が問われているが、それに対してそういう自治力を育む拠点としての力量を伴わない公民館が多くなっている。今回の解体新書塾のように地域の課題に向き合うための拠点としての公民館のあり方を見直していく動きをぜひ全国に水平的に広げていきたい。

## 7 参加者の感想（順不同：敬称略）

(八木信一：九州大学)

第1回の解体新書塾に引き続いてお世話になりました。

第1回では、私や諸富先生の問題関心を反映した調査に絡めるかたちで、公民館によるまちづくりのなかで、職員の力量がどのように培われているのかについて、グループインタビューを通したライブ感あふれる内容となっていたのに対して、今回は公民館大会への参加観察ではまた違った意味でのライブ感を持ちつつ、小田切先生の基調講演と翌日の午前中の講演を通して、いくつかのキーワードをつなぎながら、より体系的に学び、また考え直す機会を得ることができたのではないかと思います。

私も午前中の講演の1つを担当していただきましたが、そのうえで開催された午後の振り返りの会では、飯田市のみならず他自治体の公民館の担当者の方々からも、私の議論に対してご自身の体験を通し

た捉え直しや、新たな論点の提示をしていただき、研究を通した「通訳者」としての役割の重要性を改めて感じた次第です。

なかでも、上田市の中村さんが発言されていた「人と地域の近さ」と「課題の近さ」は必ずしも一致しないということは、公民館の体制や運営だけでなく、公民館を含めた多様な地域自治の仕組みのなかで、いかに地域課題を掘り起こし、また共有化していくのかという論点につながると思います。そして、それがボトムアップ型のまちづくりにおける当事者意識の醸成や内発的な取り組みという、今回の重要なキーワードに接合していくのではないのでしょうか。

また、松本市の倉澤さんが発言された地域課題における「イシュー」と「タスク」の違いも参考になりました。公民館大会ではムトスの分科会に出席しており、私が張り付いて聞いておりましたとあるグループでは、まちづくり委員会と他の団体との垣根を越えて、イシューの共有化や自らの団体によるタスクの経験を通したアドバイスが展開されていました。このようにイシューとタスクは異なる側面があるものの、それが相互に連動しながら当事者意識を関係性のなかで育てていることが、飯田市のまちづくりの大きな力になっていることを改めて感じました。

(太田隆之：静岡大学)

今回、初めて御市公民館大会ならびに解体新書塾に参加させていただきました。大変勉強をさせていただいたことを、まず、お伝え申し上げます。

これまでに諸富徹先生や八木信一先生らとともに南信州地域の調査を行ってまいりまして、御市の様々な地域づくりの取り組みや、この地域における自律的な地域づくり活動について学んでまいりました。ただ、実際にこれらの活動の現場を見る機会は多くなかったのですが、今回、公民館大会分科会で行われた議論の様子を通じて、その一端を垣間見ることができました。

また、解体新書塾に参加することで、「円卓の地域主義」の一端を見、経験することができたと考えております。無論ほんの一端だけではあるかと思いますが、いずれも貴重な経験をすることができました。厚く御礼申し上げます。

御市をはじめ、南信州地域の取り組みからは自治に基づいた地域づくりのあり方について学ばせてもらってまいりました。これまでに印象強く残っているのは、戦前の集落ならびに公民館活動の取り組みであり、町村営の電気事業です。今私が読める文献はいずれもこれらの取り組みの一部に限られたものでありまじょうが、地域社会のことを考えながら各活動が取り組まれ、電気事業の実現に至ったことに驚いてきましたところで、そうした蓄積が公民館大会分科会における参加者同士の意見交換、そして牧野市長の講演を聞きながら、脈々とそうした歴史が受け継がれ、今も生きている点に感銘を受けました。今後も御市の活動と南信州地域の活動から、学んでまいりたいと考えております。

今生活をしている静岡市や静岡県では、昨今、人口流出が全国的にも規模が大きいことが大きく報道されています。このことに危機感を持っている人々はいるのですが、概して、市や県全体で危機意識を共有するまでに至っていないという印象を受けています。交通インフラを通じて大都市圏と接点を持つことができた静岡県は、このことによりこれまでにたくさんの恩恵を得てきたと考えられますが、危機感に乏しい状況を見ると、このことに胡坐をかいているようにも見えます。今後、様々な側面で地域間競争が激化することが予想されますが、現段階では、静岡県の将来には悲観的な印象を持っています。

御市の活動に歴史的蓄積があることを思うと悲観的印象はさらに強まりますが、こちらでの研究教育を通じてほんの少しでも変えていきたいと考えております。

(上田真弓：兵庫教育大学、文部科学省)

これまで人や本から見聞きしていた飯田市の取組について、今回、公民館大会分科会でご一緒した各集落の元気な住民の方々、若手や中堅の主事さん、そして木下副館長、牧野市長と、様々な立場の方々の語りを直接聞いたことで、立体的に理解することができました。

文部科学省では、地域とともにある学校づくりの担当もしておりましたが、**子どもたちの学習の動機づけまで担わされることが少なくない現在の学校現場にとって、このような学びの場、共創の場が地域に脈々と培われているということは、学校が全て背負い込まなくてもよいという意味で、本来願ってもないことだと思います。**

**今後、学校教育も含め、次世代の学びや育ちに相乗効果が現れる日も飯田市では決して遠くないのでは、ととても楽しみにしております。**

引き続き一緒に学ばせて頂ければ嬉しいです。

(船木成記：尼崎市顧問、博報堂)

1 日目、公民館大会とパブリックビューイングという、全国的には全くつながらないはずの二つの言葉が、なんの疑問もなく同居、成立していたことに、思わず驚いてしまいました(笑)。いやー、恐るべし飯田の公民館力です。

さて、**船木の直近の問題意識は、地域資源とは協働力であり、問われるのはその総量。その総量を最大化するのが行政マンの仕事であり、人件費が事業費である。**ということでした。その意味では、八木先生の新しい研究テーマは、非常に関心があります。住民自治力が高い自治体は、財政的にも支出が少なく済むということは、非常に、実感としても共有できます。協働機会が多いことによる地域住民の税に関する自治体への信頼関係だけではなく、役割を認識し、当事者意識を育み、行動する市民が増えることは、具体的な事業費についても、その効果が現れると認識しています。それはまさしくソーシャルマーケティング的には、アボイデッドコストという視点であり、協働の視点では、コレクティブインパクトという視点になるかと思います。まさに学びつづける個人が組織を超えて集う、解体新書塾、学び合う地域同志として、これからも、みなさまと一緒に学ばせていただきたいと思います。ホスト役の飯田市の皆様、本当にお世話になりました。今後とも宜しく願いいたします。

(酒井和彦：松本市民)

1 日目の小田切先生の基調講演で考えていたのは、私的にはお金を動かせば、街の活性化や地域づくりがすぐにできるということではないということ再認識したと思います。

もともと地域というのは人と人との繋がりから派生してきたものだと考えられますし、そこには人間関係を含めいろいろな要素が含まれ、その結果として地域づくりというものに繋がっていると思いますし、特に印象的だったのはお金をつぎ込んでも短期間では地域づくりや地域の再生ができないということを考えさせられたという感じがします。

といっても経済はとても大切で、私的には松本市の状況を見ていると、経済的視点というものがどうしてもないがしろになっているという思いも持っています。

行政の立場から見れば経済的視点というのは見えづらいかもしれませんが、私のような一般の市民から見ると、どうしても経済というものも並行して考えていかなければ地域づくりという意味ではどこ

か何かは抜け落ちてしまうという感じを持っています。

これから先、市民が率先して地域づくりをしていかなければいけないということを考えると、お互いにかばいあうというお互いさまの精神とともに少し経済的なことも考えなければなかなかうまくいかないのではないかという感じがしました。

また今回、一日目の分科会に参加させていただいた印象として、飯田市の公民館は私的には松本市の公民館に比べて市民に近い立ち位置で活動されているという感じがあったと思います。

また市民の側も公民館を大切にしているという感じがしましたし、見習うべき点が多かったのではないかと思います。

数年前に伺ったときもそうでしたが、会場のかたづけなど何も言わなくても市民を含め参加した人全員で行っているところが私的には飯田市の公民館と市民の人との繋がりを感じさせますね。

2 日目に関しては、九州大学の八木先生の自治の質量と自治体の財政という話はなかなか興味深かったと思います。特に団体自治と住民自治のバランスというところが私的には重要な点という感じがしましたし、その均衡を図るために公民館の役割と言うものがかなり大きいというところが印象に残りました。

また飯田市長がお話になった円卓での地域主義という話の内容で 過疎化の村に対しての考え方や、今後地方都市がどのように変遷をしていくのかという見通しのようなものを聞けてとても興味がありましたね。

また一番最初に話のあった木下さんと船木さんの対談も、1 週間前に松本市の公民館研究集会で船木さんの話は聞いていたのでその復習にもなりましたし、その時に話された内容とはまた違う内容も聞けたと思うのでその辺も勉強になったと思います。

松本市公民館研究集会の分科会の中で出てきた内容の中で、私的に印象に強いキーワードとして「寄り添う」というキーワードが今頭の中であって、ただ寄り添うといっても漠然としていて何もわからないので、その意味を深く掘り下げていき、どのように具体性を持たせるのか、どういったことを行うと寄り添うことになるのか。寄り添うことでどのような問題が出てくるのか、また解決ができるのかというところを考える意味でも良い勉強になったと思います。

また、団体自治と住民自治に関しては私的にはあまりよくわかっていないのかもしれませんが、これも松本の文部科学省支援事業の中の高齢者支援講の中で出てきたフォーマルとインフォーマルという区分けの要素に近いものがあるという感じがしていて、それをどのように整理していくのかというところが頭の中で漠然とですが交錯しているという感じです。

(横山史樹：松本市中央公民館)

お世話になります。先日は大変お世話になりました。飯田市公民館大会・解体新書塾共に色々勉強させていただきました。ありがとうございました。

飯田市公民館大会の基調講演では、中山間地の問題を切り口に講演された、明治大学農学部教授の小田切先生のお話が新鮮でした。最近の松本市の公民館研究集会では、あまり取り扱っていない話題でしたが、松本市でも地区によって喫緊の課題ですので、公民館研究集会に限らずこのような課題を取り上げる必要性を改めて認識しました。

また、各分科会では担当の主事さんが、事例の掘り起しをしっかりと行っていることを感じさせられると共に、参加者の皆さんが活発な意見交換を行っている姿が印象的でした。

解体新書塾では、飯田市長さんが、公民館や社会教育をよく理解されて、政策を展開されていることに感嘆するとともに、財政面や政策面など違う角度で、自分たちの仕事を見つめることの大切さを感じました。来年度の自治と協働のまちづくり集会にぜひ活かしていきたいと思います。今後ともご指導・ご鞭撻よろしく申し上げます。

(金井稔：松本市中央公民館)

大変遅くなりましたが、飯田市解体新書塾参加の感想を送付させていただきます。

第2回解体新書塾に参加させていただきありがとうございました。大変勉強になりました。

2日目のみの参加となりましたが、飯田市とフィリピンのレガスピとの交流では、従来のようなインフラの整備をするだけで無く、住民自治の意識化や組織化の取組みがされており、他のお話しでも繰り返し出ておりましたが、「当事者意識」を持つことの重要性について考えさせられました。

飯田市の取組みが素晴らしいのは、地域住民の皆さんはもちろんの事、職員の皆さんもこの「当事者意識」をもつということの大切さをしっかりと理解されていることにあるのだと感じました。

行政において部局間の連携が重要となる中で、私自身も様々な課題に対し、「これは自分の部局の問題ではない」と思うことなく、常に「この課題に対し、自分にできることは何か」を考えることができるようにしていかなければならないと改めて考えさせられました。

他にも、牧野光朗飯田市長さんの円卓の地域主義のお話しや、九州大学の八木信一さんのお話し、木下さんと船木さんのお話しなどどれも大変勉強になりました。ありがとうございました。松本市でも来年「未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す研究集会 松本大会」の開催を予定しておりますが、今後とも皆様のご教授をよろしく願いいたします。

(中村文昭：上田市西部公民館)

**今回の解体新書塾では、住民が地域社会等において「主体化」していくプロセスについて、整理した話が聞けたことが勉強になった。**これらは、自分たちの公民館活動及びその活動の展開を「診る」際に役に立つと思う。**また、住民の「主体化」と共に、その「主体化」に関わる行政始めとする「支援者」の役割が大切なのだが、住民と支援者、双方の「当事者性」ということが、最後の振り返りの意見交換において話題となり、このことを考えたことが、もう一つの参加して得た収穫である。**

①

資料として配布された、飯田市で7月に行われた同市の次期総合計画策定に向けたステップアップ研修の要約には、その研修の講師である日本福祉大学社会福祉学部の大濱裕氏が、「『地域づくり計画』策定における行政職員の役割」に触れて、次のように述べた言葉が掲載されている。

「地域づくり計画」策定における行政職員の役割は、主体である地域住民の気づきの「プロセス{意識化・組織化・能力形成・連携構築}」を側面的に支援することにある。この役割を一言でいうと「ファシリテーション」ということができる。(中略)本来のファシリテーションとは、地域住民が開発主体として成長・転化してゆくことを目的とし、そのための基本的要件である「意識化・組織化・能力形成・連携構築」の充足・実現を、住民自身の「参加・協働による実践的学びのスパイラル・プロセス」として展開し、それを側面的、かつ、継続的に支援・促進していくものととらえることが必要である。

自治振興センター・公民館職員の役割としてとらえるならば、公民館主事は「意識化」「組織化」という社会的準備を担い、具体的なプロジェクトを自治振興センター長や(自治振興センターの-引用者補

注) 職員が担うという役割分担でとらえるといいのではないか。

**住民自身が「開発主体として成長・転化」していくため、側面的支援をする行為が行政職員の役割だと言われている。その側面的支援の内実は、4つのステップに分けることができ、それは「意識化・組織化・能力形成・連携構築」というものだ。**その中で、主に「意識化・組織化」の側面的支援を公民館主事が担い、「意識化・組織化」を経て開発主体へと転化・成長する住民が、何らかの事業を実践してゆくことの側面的支援を担うのが、自治振興センター職員であるということが言われている。

②

**「地域住民が開発主体として成長・転化してゆく」とは、地域社会（地域住民）が「自己組織力」を発揮していく場面のことである。**船木氏は、キーノート対談で、この「自己組織力」を大濱氏の講義からキーコンセプトとして取り出し、「自己組織力」を「エンパワー」することが、これからの行政職員の大切な仕事だと述べた。それは住民の「意識化・組織化・能力形成・連携構築」という側面的支援を、どう行政職員が、それこそ意識的に、組織的にできるか、そのための能力を形成できるか、行政のみならず多様なセクターと連携しながら実践できるか、ということが問われているということだろう。

船木氏は、**行政が住民と単に「協働」すればよい時代はすでに過ぎ、「協働 2.0」「協働 3.0」の時代に入っていると述べたが、協働の進化の方向性は、協働のプロセスを通して、いかに住民が地域社会を担う主体として成長するか、そして行政職員自身もまた、その協働プロセスのなかで、支援者として成長できるか、ということだろう。協働のプロセスを通して、いかに行政と住民が相互に成長できるのか、そのことが問われている。**どちらかが、どちらかを教化する、ということではなく、関係性の中で、住民セクターと行政セクターが共にそれぞれの仕方で成長していくことができる「協働」のあり方が、これからは求められているのだと思う。

また、船木氏からは、**チェンジエージェントの4つのステップ、①気づきと変革促進、②プロセス支援、③地域資源の積極的連結や組み換え、④問題解決策の提示とその実行、**を紹介していただいたが、これらは、大濱氏の言う「意識化・組織化・能力形成・連携構築」と重なりあっていると思う。

③

また、**八木氏の講義の中では、団体自治と住民自治、行政と住民の橋渡し組織としての「公民館の4つの機能」として、「召集、解釈、協働、媒介」が提示された。**この4つの機能は、場（プラットフォーム）、学習、対話、調整、という行為として言い換えることができ、その中で、とりわけ最初の三つの機能「召集、解釈、協働」の実践の「場、学習、対話」が、住民自治の実践に関わって、公民館が果たす役割であると言われている。この八木氏の指摘も、大濱氏の言うファシリテーションの基本的4要件と通じるものであり、公民館が担う「場」づくり、「場」に集う人々が「学習」や「対話」を通じて関係性を形成することは、「意識化・組織化・能力形成」と重なり合うものだった。

大濱氏は、住民の「意識化・組織化」を「社会的準備」と言い、その側面を公民館主事が担うと述べているが、そう捉えると、団体自治と住民自治の橋渡し組織としての公民館が、とりわけ「場」「学習」「対話」を担うと八木氏が指摘していることも興味深い。すなわち、住民はいきなり団体自治に関わるわけではなく、じっくりと「社会的準備」を住民自治のレベルで行い、その上で団体自治への関わりを深めていくと言えるのではないか。

④

牧野市長の講義では、人口増加、高度経済成長の右肩上がりの時代の行政と住民の関係性を「コントロール（管理）」と述べられていた。それは、省庁や課題が「縦割り」、かつ住民や事業者を「客体」と



捉え、「トップダウン」で「コントロール（管理）」する、という行政と住民の関係性のことである

一方、人口減少、少子化、高齢化、低成長、財政難の右肩下がり時代には、「協働」「共創」が行政と住民の関係性であり、それは、住民や事業者が「主体」であって、それを基礎自治体が「支援」し、支援する基礎自治体が支援しやすいような環境整備を国や県が行う、というあり方だと言う。

**牧野市長の唱える「円卓の地域主義」は、私の講義メモでは、「円卓を囲み、学び、対話し、議論し、当事者意識を持ち実践する」として書きとっているが、こうして見てくると、八木氏の言う「場、学習、対話、調整」、船木が紹介したチェンジエージェントの四つのステップ、「①気づきと変革促進、②プロセス支援、③地域資源の積極的連結や組み換え、④問題解決策の提示とその実行」、大濱氏の言う「意識化・組織化・能力形成・連携構築」と、響きあう概念だと言える。**

⑤

これらのプロセスモデルはいずれも4つのステップとして提示されているが、大切なのは、4つが平板に並んでいるわけではないし、4つが順々に進むわけではない、という点だろう。とりわけ、**大濱氏が「社会的準備」と述べていたように、住民の主体化を焦るあまり、「意識化・組織化」の側面がないがしろにしない、ということだ。ここにおいて、社会教育機関としての公民館、ないしは、そのような公民館のあり方を念頭においた「公民館のようなもの」の役割発揮の場面があるということだ。**

とかく、地域自治組織や住民自治組織の議論の中では、住民の実践が強調されることが多いが、「社会的準備」なくして実践はなく、実践する主体も育たないのではないかと思う。すばらしい実践をしている組織があり、そこに人材がいるのであれば、その実践活動の前史においては、「社会的準備」としての「意識化・組織化」があり、その公民館のような活動のプロセスを支援する者がいたと見るべきだろう。

⑥

振り返りの会で、上田市の公民館から見た飯田市公民館について一言言ってほしいと言われて、対象地区の広さや専門委員会の有無から、地域への近さ、人への近さ、課題への近さ、ということ述べた。

上田市は対象地区は中学校区範囲で、分館との結びつきは比較的ある方だが、専門委員会という組織は無い。対象地区が小学校区が基本で、専門委員会も組織されている飯田市や松本市の方が、公民館や公民館主事は、地域に近く、地域の人に近いと思う。その距離感の中で、職員の住民像、住民の職員像が更新され、職員の住民に「巻き込まれる力」が涵養されるのではないかと思う。

そして、**「巻き込まれる力」の種の一つに、地域や人に対する「当事者性」を持つことがあるのではないか。**その場合の「当事者性」は、マイノリティや障害者の方達の「当事者性」とは違った意味あいだと思う。そして、課題への近さ、ということについては、地域や人への近さとは違った意味あい述べたが、課題についても、「当事者性」ということが、一つの切り口になると思う。それは、重複するが、マイノリティや障害者の方達の「当事者性」とは違った意味あいになると思う。ネガティブな課題、ポジティブな課題、という事が講義で話されたが、そういったこととも関係してくると思う。（

（橋本尚也：島根県邑南町日貫公民館主事）

邑南町は12地区の各地区に公民館があり各公民館では町職員が主事として勤務しております。今回他地域の同じような体制で公民館運営をしておられる飯田市さんの他各市の公民館と研修・交流をすることができ、大変よい研修会に参加出来たと思っています。多少運営方法に違いはあるにせよ、地域にとって公民館はなくてはならないもので、公民館が中心となって住民自治を進めていくのだという思い

は共通だと感じました。また交流を図る中で飯田市職員の方の意識の高さもとても感じました。話を聞くだけでもとても刺激になりましたし、自分こそもっと当事者意識を持って公民館の仕事をしていく必要があると思いました。

その中で振り返りの最後の「ぼちぼちチーム」（というチーム名）だったと思いますが、どこの公民館か忘れてましたが館長さんが意見を言っておられました、「どうやって住民の方に当事者意識を持っていただくか」という意見があったと思いますが、私もそのように感じました。ある意味住民の方に当事者意識を持たせないといけない、ということだと思いますので、どうやって持たせるかが今後の私の課題の1つではないかと思っております。

（桂山智哉：尼崎市役所）

1日目の公民館大会は飯田市内外よりたくさんの方が集っておられ、非常に熱気を感じるとともに、市民への行政に対する関心の高さに驚きました。尼崎市における公民館の位置づけとは全く違う、独自の取り組みを知ることができて目からうろこでした。公民館が主体となって、市民の意見を取り入れて地域社会を紡いでいく、ボトムアップ型のまちづくりにとても魅力を感じました。また、小田切先生の講演の中で、限界集落についての言及がありましたが、地域住民が諦めた時点から地域の崩壊がはじまるという言葉が強く印象に残りました。2日間の会を通して、「当事者意識」という点がキーワードだったように感じます。いかに市民力、住民力が大事かということを中心に刻みつつ、行政の仕事に取り組みたいと思います。

2日目の解体新書塾には初めての参加でした。牧野市長のお話の中でも、地域で古くから受け継がれてきた文化を残すことの重要性が語られていましたが、私もこの点には強く共感致しました。伝統文化を残すためには人から人への伝承が不可欠です。人が生活する場所を守るということは、予算などの問題を度外視して優先すべき事項だと思います。「公民館は世代交代や伝承のための施設である」と1日目の分科会で小田切先生も仰っていましたが、尼崎市でも公民館がそのような機能を果たせるようになればもっと良いまちになると感じました。

（行野修一：石川県内灘町大学公民館館長）

この度は、解体新書塾に参加させていただきまして、ありがとうございました。

昨年9月の千代公民館の視察をきっかけに、今回の解体新書塾に誘って頂いた訳ではありますが、改めて「住民が主役」の飯田市型の公民館の様子を知ることができました。

分科会では、住民の皆さんが自らやりたいことを実践している事例や、住民を巻き込んでゆく方法など、具体的な話を聞くことができました。本当に住民の方々が自分たちの地域は自分たちでつくるという、まさに「公民館をやる」という意味が分かったような気がします。

また、2日間の研修を通して牧野市長自ら講義して頂いたり、懇親会に同席して頂いたりしたことには、感謝とともに驚きを感じております。市長の地域に対する熱い思いが感じられました。そして、飯田市の職員の皆様と住民との良い関係が構築されていることを分科会などで感じる事ができました。さらに、今回の解体新書塾で、大学の先生方や各地の公民館関係者の方々とお話しでき、大変に有意義な研修をさせていただきました。それぞれの立場で地域との係わり方は異なりますが、皆さん、地域のことを考えていることは共通しております。これを機会に今後とも交流させていただければありがたいと思っております。

さて、私たちの石川県内灘町（人口約 27,000 人）には、各町会に 1 公民館、合計 17 の公民館があります。私たちの大学公民館は、このひとつの小さな公民館であります。

内灘町の公民館活動は行政主導型であり、住民がそれに参加するという従来の形態であります。したがって、住民が主体となって自分たちの地域を善くしようという意識が薄いように思います。今後、飯田市型公民館をモデルに、住民が主体となる町に少しでも変わって行くことができればと思います。

まずは、飯田市型公民館モデルを内灘町の行政や各公民館へ伝えてゆくことが重要だと思っております。そして、自分たちの大学公民館が飯田型公民館モデルに近づくことで、各地区の公民館へ良い影響を与えることができれば幸いと思います。

今回の 2 日間の解体新書塾で、いろいろな方々とお会いする事ができ、大変有意義な勉強をさせていただきました。

これを機会に、今後とも交流させていただければ幸いです。

本当にありがとうございました。

（塩澤真洋：駒ヶ根市立赤穂公民館主事）

第 1 回目について参加となりました。前回は公民館主事になったばかりのころで、「公民館業界の最前線ではこのような議論が交わされているのか！」という新鮮な驚きを感じました。2 回目の今回は、いくらか公民館主事として経験を重ねたこと、公民館を取り巻く実情もぼんやりと分かってきたことなどもあり、前回よりは落ち着いて参加することができたように思います。

プログラム全体の流れがとても良かったです。初日は飯田市公民館大会を“フィールドワーク”し、夜は盛大な懇親会。2 日目は船木さん、木下さんの対談でこれまでの論点が整理され、八木先生の講義で「財政」という新たな視点が注入され、牧野飯田市長の講演には公民館的発想をベースにした地域づくりの一つの理想形を見た気がしました。

最後の振り返りではうまくまとめられなかったのですが、今あらためて思い返すと、3 つのキーワードが浮かんできます。

**1 つ目は「当事者意識」。**初日の基調講演で明治大学の小田切教授が強調し、その後も多くの方の口から出てきた言葉だったのですが、皆さん同様、私の心にも残りました。**2 つ目は「内発」。**どなたの口から発せられたか失念してしまいましたが、地域の未来を信じて掘り下げた先にある到達点に結びつくような希望を感じます。そして **3 つ目が「信頼」。**これは八木先生の講義の中にあつた「政府に対する信頼と政府の借金の関係」の説明の中で個人的に印象深かったのですが、「やっぱ何事にも信頼は大切なんだ」とあらためて認識することができました。

**「当事者意識」「内発」「信頼」。**この 3 つのキーワードを自分なりに解釈した結果、市民の方と普段接する中で「信頼」を構築し、そのプロセスで、あるいはそれをベースに公民館利用者たる住民の「当事者意識」を呼び起こし、助け合いながら地域を掘り起こし続けた先に結果として「内発」的な発展がある、こんなイメージを持つに至りました。これはそのまま、公民館主事として保つべき姿勢に通じると感じています。

1 回目同様、多くのことを学べた集会でした。今後どんな事業を実施するにも、まずは目的をしっかりと整理し、将来像やそこにたどり着くまでのプロセス（ストーリー、仮説）を持って、独りよがりになることなく仕事をしていこうと思います。

(熊谷隆幸：飯田市竜丘公民館主事)

解体新書塾や自治と協働のまちづくりを目指す研究会など、いくつかの集まりに参加してきて、飯田市の公民館主事として飯田型公民館の仕組みを学んできました。午前中のみ参加でしたが、先人たちが作り上げてきた仕組みや住民との関係性の上に、今の自分たちは住民の方々と共に活動できていることを思い起こす機会となっています。

大濱先生の話は、飯田型公民館の仕組みを考えるにはとても有用だと感じているので、今回キャンセルになってしまったのは残念だと思いました。

市長のお話の中で、市政経営の方向について説明がありましたが、公民館的手法と照らし合わせながら、自分の中でも整理しながら聞く事が出来ました。より善い地域を目指した地域づくりのためにも、主体的な人材育成のためにも、公民館の社会教育の役割の重要性を感じました。同時に、様々な分野で行政職員が主体性を持って取り組むことが重要だと感じました。

住民を「地域資源」という言葉で表現するのは失礼だといった話がありましたが、地域は人と人との関わりで成り立っている以上、最も重要な資源の一つは「住民」であり、住民にとってもより善い地域にしていくために、行政職員、公民館主事も「資源」なのだと思います。言葉の問題ではなく、住民も行政職員も「人」が大事で、そこでより善い地域を一緒に考え、学び、取り組める関係性や意識づくりが、飯田では公民館を通してできているのではないかと考えました。

午後の部には出られなかったのですが、今度は他自治体の方々などから、それぞれの取り組みや、「公民館的なもの」について話を聞きたいと感じました。

(永田麻美子：飯田市上久堅公民館主事)

八木先生の講義は自治体における飯田市の公民館の立ち位置、また公民館主事として必要とされる要素を多面的角度からデータに基づいて分析してお話しされ大変興味深かったです。地区公民館の機能については、「場」、「学習」、「対話」、「調整」があり、その中の「対話」には地域の方と公民館主事が平らで意見を交わす環境があり、協働を促しているとの説明はとても理解しやすかったです。日々の業務の中で普通に行っていることを図式化していただき、改めて、飯田市の公民館には日常の中で地域の方と協働する場が存在していることを認識しました。その環境を当たり前にして仕事ができていることはとても幸せなことだと実感し、同時に公民館主事として与えられた場をどう生かすか、きちんと向き合えているのか考えさせられる機会になりました。また、市税収納率には市に対する信頼感があり、それが公民館との関わりも深いという見方はとても感慨深かったです。地域の信頼の元に仕事ができることに感謝してさらに地域づくりを学んでいきたいです。

(青木真由子：飯田市三穂公民館主事)

船木さんのお話では、昨年の夏の上田での研修をなぞる気持ちで聞かせていただきました。自分が公民館主事としてではなく、行政の職員としてやらなければならないことをお聞きしました。人件費削減による人員削減などの反面、公民館や行政に求められてくるのは多種多様なニーズであり、それらに对应していくためには市民との協働が欠かせない、また、その総量を上げていかねばならない。力や元気のある方たちをつなぎ、協働して、手を差し伸べてほしい人を助けるためには、その公民館主事や職員にも住民に声を聴いてもらえるような一種の魅力がないと難しいのではないかと感じました。また、自分自身はその魅力づくりのために自分を磨くことができているのか、反省すると共に自分のやるべきこと

に責任の重さを感じました。

八木先生のお話では、公民館の活動や役割、成果を【効率性】という経済学的な視点でとらえる内容のものだったと思います。住民の公民館活動への参画が、市職員への信頼につながり、その感情は租税協力にもつながっているという大胆でも、自分が今まで考えたことも無いような切り口で公民館活動を振り返ることができました。

午後の意見交換では「当事者意識と地域課題」という言葉が多く出されましたが、1つの物事に対して誰が責任を持っているのか、またその責任を周囲の人にどう関与させていくか、という当事者意識を持つのではなく、引出し、共有させることが公民館の役割の重要なものの1つではないかと感じました。

(鈴木勇氣：飯田市羽場公民館主事)

他の研修もそうだが、毎回参加者の意欲の高さに刺激を受ける。**飯田市の主事は環境として、住民が地域自治に対して関心が高かったり、公民館主事を受け入れ、期待し、育てるという意識があったり、仕事をしやすい状況だと思う。それは飯田市に根差している公民館活動があり、先輩の主事が築いてきた関係性があるからである。その上にあぐらをかいているのではなく、その状況に対する自らの力量に不安を持ち、積極的に学ぶ姿勢が必要である。他県他市で頑張っている主事の方が、意欲が高い。飯田市の公民館活動を専門家に分析していただき、評価をされるたびに、自分の主事としての仕事に対する姿勢が不安になる。**

一方、自分の実践に照らし合わせた時に自信につながる部分もある。「当事者意識を持つ住民を増やす」というキーワードがあったが、地域づくりへの関心を広げたいと思い実践していることが間違っていないことだと、違う言葉で教えてくれた。自らの実践が自信につながった時に「地域で育てられている」ことを実感する。

「地域が主事を育てる」仕組みを分析するのも面白いと思った。

(横山淳也：飯田市座光寺公民館主事)

飯田市公民館や飯田市に対する客観的な分析を聞くことのできる貴重な機会だったと思う。

八木氏の講演のなかで、飯田市型公民館の見取り図（P13）、行政（団体自治）と住民（住民自治）とを結びつける「地方自治の結節点（橋渡し組織）としての公民館」を見たときに、なるほどと思った。公民館という組織とそこに携わる自治体職員の意義や役割が分かりやすく図にされているなあと思った。

「協働」という言葉が繰り返しでた。八木氏の講演で「地域ガバナンス（協働）の苗床としての公民館」という図（P19）の中で、協働のなかでの公民館の機能（場、学習、対話、調整）について、分かりやすく説明されているなあと思った。

人材サイクル構築、持続可能な地域づくりに向けた「多様な主体による協働」といった姿勢経営の話が市長からあった。公民館の役割・機能の重要性を感じた。

「協働」を重視する飯田市の自治の在り方は、「団体自治」と「住民自治」のバランスをとることを大切にしているのだと思った。

当然言いにくいとは思いますが、飯田市や飯田市型公民館に対する率直な疑問や批判も聞きたかった。そうでないと健全な発展はないと思う。（エゴイスティックな住民が多いのでは、という分析があったように。）

(西脇充：飯田市丸山公民館主事)

今回の解体新書塾は、2日目からの参加になりました。

2日目の中で特に印象に残っているのは、船木さんの話です。大切にしたい言葉がたくさんありました。

「協働そのものが目的ではない。協働のプロセスで、何を達成するのか。「協働力の最大化」こそが行政・公務員の仕事になる。」これは、僕らが普段主事として仕事をしている中で、常に意識していることではありますが、なかなか難しい課題だと感じています。

個人の課題を地域社会の課題へ。どう課題を抽出し、それに対してどう意識化・組織化・(解決のためのプロセスを)デザイン化していくか。個人の課題がすべて地域の課題とは限らないとは感じていますが、住民とどう話し、どう地域課題を見つけていくのか。主事会等で今後もしっかり話をしていきたいと思います。

(新井康平：飯田市千代公民館)

船木顧問、八木教授、牧野市長の異なる視点で、「住民自治力を育む」ことの話の聞き、それがどうということなのかより具体的に視ることが出来るようになったと思う。

主事1年目は専門委員会事業に追われ、そういった住民自治を育てているとはどうしても思えず悩み苦しんだが、2年目となり、広い視野で視たとき飯田型公民館の土台の強さに繋がっていることを感じるようになった。これからは、飯田型公民館の強みを活かしつつ、その先の活動に発展させていくことで住民自治力を育むことが重要になってくると思う。

(小島一人：飯田市公民館主事)

既存の仕組みを様々な視点から捉え直して整理し、そこから本質的な要素を抽出する貴重な機会に参加させていただきました。

**私の今の関心は、飯田市公民館主事の「チーム」としての機能向上にあります。**今回お聴きしたような話を組織として、また個人として、高次のバランスを取りながら実践に繋げていくためには、個々の経験なり知識の範囲で解釈するだけではなく、いかに理解や気づき、疑問などを共有できるかが重要だと感じています。

解体新書塾に参加していたみなさんは、それぞれ高い関心や課題意識を持って臨んでおり、そのこと自体が刺激的でした。時期的な理由から、飯田市公民館からの参加者が少なかったのですが、このように他市町村から参加されたみなさんと考えをぶつけ合うことができる機会・環境があることは、現場で動く主事にとって非常に貴重なものであることは間違いないと思います。

そして、**個々の知識・経験を深めることのできるこのような機会を、飯田市公民館主事会というチームとしてどのように捉え、自分たちの活動の中に位置付けていけるかが試されているのではないかと感じました。**

講義記録の文責及び **(太線：アンダーライン)**：飯田市公民館 木下巨一